

香港ジョッキークラブシリーズ：

ムガル王朝宮廷の至宝 - ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館蔵

南アジアのムガル王朝（1526年～1857年）は、1560年代から1660年代にかけて「黄金期」を迎え、当時の世界における強大な帝国の一つとして栄えました。この時代を治めたのは、アクバル（在位1556年～1605年）、息子のジャハーンギール（在位1605年～1627年）、そして孫のシャー・ジャハーン（在位1628年～1658年）という3人の傑出した皇帝でした。本展では、南アジア、中国、イラン、ヨーロッパなど多様な文化要素が融合して生まれた宮廷の豊かな芸術伝統の形成と発展において、この3人の皇帝が果たした役割に注目しながら、ムガル王朝が築いた稀代の芸術を堪能いただけます。

ムガル王朝はペルシア語を使用するイスラームの国家でした。初代皇帝のバーブル（在位1526年～1530年）は、中央アジアの征服者アミール・ティムール（在位1370年～1405年）と、モンゴル帝国の建国者チンギス・ハン（在位1206年～1227年）の末裔です。その王朝は、ペルシア語で「モンゴル」を意味する「ムガル」と呼ばれるようになりました。

本展は、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館と香港故宮文化博物館の共同開催であり、香港ジョッキークラブ慈善信託基金が単独スポンサーを務めています。V&A から貸し出された約100点の壮大なコレクションは、クウェート、英国などの国際的なコレクションからの作品とともに構成されており、絵画から宝飾品、建築物の一部、武器、染織品、陶磁器まで多岐にわたります。また香港故宮文化博物館、香港故宮文化博物館のクリス・ホール・コレクションおよび夢蝶軒コレクションからの貴重な貸出品も展示されています。

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館について

ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（V&A）は「創造性の力」をテーマに掲げる、複数拠点を持つ博物館です。創造性は、人々に楽しさや感動をもたらし、生活を豊かにするとともに、広い視野を育み、世界を変える力を持っています。V&A は、展覧会やイベント、教育プログラムやデジタル体験、280万点に及ぶ収蔵品コレクション、新しい作品の支援、作品保存や研究、そして持続可能なデザインへの取り組みを通じて、創造性の力を讃え、広く共有しています。これらの活動を総合的に展開し、5,000年以上にわたる創造の物語を伝えることで、各地で文化的な理解を深め、現在と未来の作り手、クリエイター、イノベーターにインスピレーションを与え続けています。

タージ・マハル：永遠の愛と建築の至宝

ムガル王朝でも最も偉大な皇帝の一人で芸術のパトロンでもあったシャー・ジャハーン（在位1628年～1658年）は、数多くの業績を残しています。その中でも重要な偉業の一つが、ムガル王朝の首都アグラに建設されたタージ・マハルです。これは、愛妃ムムターズ・マハル（1593年～1631年）を偲んで建設されました。王妃は14人目の子の出産後、1631年に亡くなりました。悲しみに暮れた皇帝は壮麗な霊廟の建設を計画し、これが後にムガル建築を象徴する最高傑作となりました。皇帝は、この建築のために多くの優秀な人材を採用しました。17世紀の最も偉大な建築家の一人であるウスタード・アハマド・ラーホーリー（1580年～1649年頃）が主任建築家に任命されたほか、建物に大きく刻まれた碑文はイランの書家アマナット・カーン（1570年～1645年）が書いたコーランの一節でした。この霊廟の建設と装飾には、数千人の芸術家が従事し、ムムターズ・マハルの死後12年後に正式に完成しました。ノーベル賞受賞詩人ラビンドラナート・タゴール（1861年～1941年）は、タージ・マハルを「時間という頬の上にこぼれ落ちた一粒の涙」と表現しました。現在、この墓廟はかつてと変わらぬ輝きを放ち、世界の新・七不思議の一つとして広く知られています。

第 1 章 新時代の創始者

アクバル皇帝（在位 1556 年～1605 年）

ムガル朝を建国したのはバーブル皇帝（1483 年～1530 年）ですが、王朝の真の建設者として知られているのは孫のアクバルです。アクバルはわずか 14 歳で即位し、即位当初の混乱期に征服と外交的な同盟によって、ムガル王朝の領土を急速に拡大しました。アクバルは宗教的融和を図り、多数のヒンドゥー教徒を含む多様な人々を統治するための基盤を固めました。民心を啓発する宗教政策やさまざまな革新により、帝国の繁栄に寄与しました。

アクバルはまた、芸術の偉大なパトロンとして、さまざまな芸術分野を対象とした宮廷工房を設立しました。そこでは、南アジアやイラン出身のイスラム教徒とヒンドゥー教徒の芸術家が協力し、宮廷のために膨大な数の芸術品を生み出しました。ムガル宮廷は中国とヨーロッパの文化要素も取り入れていました。これらの多様な伝統の融合は、革新的で独自性あふれるムガル芸術の創造につながりました。

王朝の建築者

アクバル皇帝は、アグラ、デリー、ラホールといった活気あふれる大都市で、新たな宮殿の建設など、大規模な建設プロジェクトに着手しました。ムガル王朝の領土が拡大するにつれ、宮廷はさらに多くの地域の伝統的な産業も利用できるようになりました。たとえば、アクバルが 1573 年に征服した西インドの豊かな地域、グジャラート州では、真珠貝や象牙を用いた特徴的な手工芸品の生産が盛んになり、アクバルの治世で発展しました。

多様な文化の宮廷工房

先見の明があったアクバル皇帝は、「書籍院」や卓越した芸術家と職人が協力して働く金細工師の工房など、作品を宮廷に供給するための複数の工房を設立しました。行政言語がペルシア語であったことから、ムガル宮廷の工房には、イランから移住してきた熟練の画家、書家、織工、建築家たちが集まりました。こうした職人により、地元のヒンドゥー教徒やイスラム教徒の職人とは異なる芸術的伝統がもたらされました。ムガル宮廷では中国の磁器も使用され、宮廷で珍重されました。1580 年代に、ポルトガル領ゴアからイエズス会の最初の使節団が、ムガル王朝の新たな都ファタープルに到着すると、宮廷工房ではヨーロッパの芸術的要素も作品に取り入れるようになりました。これらの多様な文化的伝統は、ムガル芸術の発展に永続的な影響を与えました。

第2章 世界の財宝の探検者

ジャハーンギール皇帝（在位1605年～1627年）

1605年にアクバルが死去すると、その息子サリームがムガル朝皇帝の位を継承しました。サリームはペルシア語で「世界を征服する者」を意味する「ジャハーンギール」という称号を名乗りました。新皇帝ジャハーンギールは、父親から安定した豊かな領土を継承し、芸術支援の伝統も引き継ぎました。宮廷の支配層は広範な人脈を駆使し、皇帝のために価値ある、珍しい、精巧な品々を探し求めました。中国西北部のホータンから輸入された軟玉の翡翠は、宮廷では希少な素材であり、皇帝の工房で器や装飾品に加工されました。

ジャハーンギールは詳細な日記を残しています。その中には、自然界への好奇心や狩猟、美しい風景の鑑賞といった趣味を含む、自身の活動と関心が記されていました。また、広大な領土を頻繁に旅し、常に宮廷工房で働く芸術家や職人を伴っていました。皇帝の自然探求への強い関心は、治世中のムガル芸術に大きな影響を与えました。皇帝は宮廷芸術家に動植物の記録を命じ、その自然研究は翡翠、金、銀の器を含むさまざまな芸術分野で再現されました。

世界の宝物庫

ジャハーンギール皇帝の宝物庫には、膨大な量の宝石、金、宝石細工の工芸品、高級磁器などの宮廷生活や儀式に使われていた豪華な品々が溢れていました。皇帝は立派なマント、壮麗な宝石、そして宝石で飾られた武器を身に着けていました。宮殿には金糸で刺繍された織物がきらきらと飾られていました。ムガル朝への初代イギリス大使のトーマス・ロー卿（1580年～1644年）は、ジャハーンギールの宮廷の眩いばかりの壮麗さを目の当たりにして、宮廷を「世界の宝庫」と形容したほどでした。

旅と自然による影響

ジャハーンギール皇帝が頻繁に各地を旅していたことは、彼の治世の特徴でした。皇帝は、庭園や新しい建築プロジェクトの視察、狩猟などの目的に加え、ラホール、アグラ、デリーの首都の夏の暑さを避けるために旅行しました。これらの旅行には、王族、侍従、役人だけでなく、宮廷の一流の芸術家や職人も同行しました。芸術家が旅先で制作した芸術作品は、ムガル朝の宮廷芸術に新たな要素をもたらしました。ジャハーンギールによる自然界の詳細な観察を記録した者もいれば、植物や動物のイラストを描いたりヨーロッパの植物図鑑を模写したりすることを命じられた者もありました。これらの動植物のモチーフはその後、写本の縁飾り、王室の建築物、儀式用の武器の装飾にも用いられました。

第3章 地上の楽園の建築家

シャー・ジャハーン（在位1628年～1658年）

ペルシア語で「世界の王」を意味するシャー・ジャハーンは、父のジャハーンギールが1627年に死去した後、皇帝に即位しました。ムガル朝で蓄積された莫大な財力により、シャー・ジャハーンは精巧な宝石細工を施した工芸品を作らせました。この時代の翡翠彫刻は、後に中国の乾隆帝（在位1736年～1795年）のコレクションでも貴重なものとなりました。皇帝は建築にも情熱を注ぎました。シャー・ジャハーンの治世で最も有名な建造物は、最愛の妻ムムターズ・マハル（1593年～1631年）の墓廟として建設された壮麗なタージ・マハルです。

シャー・ジャハーンの治世におけるムガル朝の芸術は、その豪華さと花の模様で知られています。ヨーロッパの植物版画に触発されたムガルの芸術家は、バラ、ユリ、チューリップ、アヤメなどさまざまな花を写實的に表現しました。花のつぼみや咲き誇る花々はタージ・マハルを飾るだけでなく、宝石に刻まれ、布地に織り込まれ、写本の縁に描かれて、この時代の王朝の美と永遠を表現しており、王朝がまるで楽園のようだったことがうかがえます。デリーにあるシャー・ジャハーンの宮殿に刻まれた有名なペルシア語の詩にも、「地上に楽園ありとせば、そはここなり、ここなり、ここなり」とうたわれています。

地上の楽園

花の模様は、タージ・マハルを飾るだけでなく、シャー・ジャハーン皇帝の治世下の他のムガル芸術にも影響を与えました。専門の工房で働く芸術家たちは、伝統的な模様を花模様で置き換え、この新しい宮廷様式を確立しました。様式化された花模様は、腐敗、病気、飢饉、貧困の影響を受けずに永遠に生きるという理想の世界を想起させます。花模様の装飾を施すことで、芸術家たちはシャー・ジャハーンの統治下にあるムガル王朝が、理想の楽園であると称えたのです。

文化交流と互いへの影響

シャー・ジャハーン帝の治世中、ムガル王朝の翡翠職人たちは、他の国からのデザインを作品に取り入れ続けました。たとえば中国の瓢箪、ヨーロッパの野菜のモチーフ、中央アジアに生息する動物をかたどったりしたものです。この地元のデザインと他国由来の要素を継続的に融合することにより、独自のムガル様式はますます洗練され、その影響は他の地域にも広がっていきました。中国で最も偉大な芸術収集家兼パトロンの人である乾隆帝（在位1736年～1795年）は、ムガル王朝の繊細で優雅な翡翠に魅了され、中国の職人たちにその模倣を促したほどです。

悠久なる遺響

シャー・ジャハーン皇帝の治世は、皇帝が1658年に重病に倒れたことで突然終焉を迎え、その三男であるアウラングゼーブ（在位1658年～1707年）が権力を掌握しました。新皇帝はムガル王朝の領土を大幅に拡大しましたが、これにより王朝は弱体化し、その後かつての勢いが戻ることはありませんでした。しかし、ムガル芸術の輝きは「黄金時代」の終焉後も消え去りませんでした。ムガル朝が衰退する中、宮廷の芸術家や職人たちは他の宮廷に仕えるようになりました。これによりムガル朝で発展した技術やデザインが各地に伝播し、現地のスタイルに適合していきました。現在でも、シャー・ジャハーンの治世の建築様式や花模様にした様式や模様が南アジアで広く用いられています。ムガル朝の影響は世界中に及んでいるのです。英語の「mogul（モーグル）」という言葉は、ムガルと似た発音を持ち、ムガル皇帝のように莫大な富と権力を持つ人物を意味しています。